法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

# ドストエフスキーとキリーロフ(2)ドストエフスキーと「人神」

近田，友一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
85
(開始ページ / Start Page)
21
(終了ページ / End Page)
44
(発行年 / Year)
1993-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004563

Hosei University Repository



# ドストエフスキーと「人神」

## ——ドストエフスキーとキリーロフ　Ⅱ——

近田友一

## Ⅰ

キリーロフは決定稿のなかで展開された人物である。『悪霊』の創作ノートを克明に調べてみても決定稿のキリーロフを想わせるようなデテールは記されていない。スタヴローギンが終始作者の関心の中心にありつづけたのに較べてその隔りはあまりにも大きい。

キリーロフは第三ノート「九月十二日（一八七〇年）大構想」以降、「技師」として出てくるが、ネチャーエフとの関わりのなかでの自殺者としての役割、配置が主に考えられているだけで、その思想自体は書かれていない。多分、キリーロフはシャートフ殺害の冤罪をかぶる人物としてのみ構想されたのであろう。その冤罪を引き受ける動機としての自殺論が尋常でなかったために、自己増殖して後に大きなテーマにまでなったのかとも思われる。キリーロフの最初の登場はこうだ。

技師は檄文を持って来て、フェージカその他の人々とともに南の方の工場にばら撒く。ネチャーエフの実行者はこう考えている——もし知れたら、俺一人が捕まればいいんだ。俺は紙の上で自白してピストル自殺す

Hosei University Repository



る。なぜなら、俺にとってそれは同じことだからだ。（傍点ドストエフスキー）（『悪霊』創作ノート　手帖第三）[1]

「同じこと」という発想は後のキリーロフの思想の根幹にかかわらなくもないが、この時点ではそれほど深い意味で言われたとは考えにくい。そのすぐ後の記述がキリーロフの〝位置〟を物語っている。

技師は共同の事業のために自殺すると申し出た。
最も必要なこと――技師の役割は実際的である。[2]（傍点ドストエフスキー）（同前）

ノートのなかでは「技師」の役割は限られており、その範囲から出ることはない。なぜ「同じこと」なのか――問われることはない。作者は「技師」を単にアナーキーな、ファナティックな人物として構想しているにすぎない。

現在残されているノートと決定稿のキリーロフはまるで違う。その変換が行われたプロセスは知る由もないが、決定稿のキリーロフとして発展するまでには――〝人神〟に至るまでには作家自身の精神遍歴の長い道程がある。

## Ⅱ

年長の友人、詩人シドロフスキーの少年フョードルにあたえた影響はかなり深い。レーベルの兄ミハイル宛ての書簡の「思想」がどこまでドストエフスキー本人のものか分明でないところもあるが、やはり看過出来ないドストエフスキーの〝原点〟を示している――「在る」ことの意味を彼が最初に気にした文章としてみておく必要があろう。

いつぼくのわびしい想念がおさまることやら、自分でもわかりません。人間に授けられている状態はただ一

Hosei University Repository



つです――人間の心のアトモスフェアは天的なものと地的なものの融合から成り立っています。人間はなんという背理的な子供でしょう。だって精神の自然の法則が破られているのですからね。……ぼくにはこの世界が罪深い想いで曇らされた天の精霊の煉獄のような気がします。この世界が否定的な意味をもったので高遠優美な精神的なものから風刺が出てきたというふうにも思われます。この画面の中に全体との効果も思想も何の共通点ももっていない人間が、要するに全く無関係な人間がとびこんだとしたらどうでしょう。画面は滅茶滅茶になって存在することも出来ません。(一八三八年八月九日付)[3]

人間は「宇宙の孤児」という認識はドストエフスキーの思想の原点である。宇宙の調和から独りはずれた存在だという観念はやがてイッポリートに引き継がれていくが、ここではフョードル少年が人間存在の原型をすでに規定しようとしていることに留意する必要があろう。

「背理的」とはどういう意味であろうか。直後に「自然の法則が破られている」と言っているところからみれば、ポイントはむしろ「自然の法則」の方にあろう。宇宙の秩序の整然たる運行が人間によって乱されているとすれば、罪は「自然の法則」を乱している人間の側にあるのか、人間を容れようとしない宇宙の秩序の方にあるのか。

ドストエフスキーのたてた問いは、宇宙と人間の関係がもっている本来の〝背理性〟に関わっている。人間の意識はつねに自然律に背くことによって自己を主張し、人間としての存在を確立しようとするが、自然律はそんな人間の意識を一切無視する。人間も他の存在物と等し並みなのである。そこには人間の尊厳はない。意識をもった唯一の存在物としての尊厳にこだわる限り、人間は「自然の法則」と対立せざるを得ない。

人間がただ「在る」ということは、それ程易しいことではないと十七歳のドストエフスキーは気がついた。宇宙との、世界との順接的関係が難しいとしたら、どこに調和への道があるのか。

このドストエフスキーの最初の、いわば「宇宙への根元的な問い」は、暫らく中断されたまま放置される。ドストエフスキーも当時の若者の一人として「虐げられし人々」に深い関心をもち、社会制度の改革に――人と社会の

Hosei University Repository



関係の問題に心を奪われていたからである。その間形而上的問題は作家の関心の埒外におかれていたかのようにみえる――十七歳のドストエフスキーがたてた問いは、当時の彼には焦眉の問題ではなかった。

『貧しき人々』の成功は作家にこの思いを一層つよくさせたに違いない。『分身』以後ベリンスキー一派と隙を生じてからも、むしろ前にもまして彼の空想的社会主義への傾倒は深まっていく。だが、ペトラシェフスキー事件への連座がドストエフスキーをその〝逸脱〟から引き戻した。結果的にみれば、〝人と社会〟の問題への過度の熱中が、〝絶対者と人間〟のそれへ――十七歳の問いの前に彼を再び立たせたことになる。

## Ⅲ

ドストエフスキーがセミョーノフスキー練兵場で〝金色の光〟をみたのは、一八四九年十二月二十二日、二十八歳の時である。十年余の歳月を経て彼は忘却していた根源的な問いをまたつきつけられた……しかも絶体絶命の場で、それ以上ない舞台でである。そこには神の悪意すら感じられる。あるいは神の挑発とも悪戯ともみえる。いずれにせよドストエフスキーはえらい場所で「宇宙の根底に在るもの」と対面したのだ。

いま自分はこうして存在し生きているのに三分たったらもう何かあるものになる。だれかに、でなければ、何かになるのだ。一体だれに？　そもそもどこで？　こういったことをみんなこの二分間に解決しようと思ったのです。ほど遠からぬところに教会堂があって、その金色の屋根の頂が明るい日の光に輝いていました。彼はおそろしいほど執拗にこの屋根と、屋根に反射して輝く日の光をみつめていて、その光から目を離すことができなかったことを覚えていました。この光こそ自分の新しい自然である。三分したらなんらかの形でこの光と融合してしまうのだという気がしたそうです。（傍点ドストエフスキー）（『白痴』第一編第五章）[4]

ドストエフスキーが視ていたのは現実の光ではない。すでにこの時彼は現実の人間ではない――意識は透明にな

Hosei University Repository



り、金色の光の〝向うの世界〟に透入している……　限界まで凝縮された濃密な時間の中でドストエフスキーは幽かに未知のものに触れた。それは今まで彼が体験したこともない何かである。その瞬間、虚に――存在の奥にある非在に触れたのかも知れない。それは現実の人間にかえったドストエフスキーにも重い〝謎〟の感覚として残った。

「死の家」にいる間もドストエフスキーはこの〝謎〟の感覚につき纏われた。シェストフの言う「全身目玉に覆われた」死の天使が頒けていった〝眼〟がこれかも知れない。死刑「体験」以後ドストエフスキーは時として現象の向うに――存在の奥に何かを感知するようになる。『死の家の記録』は一見何気ないスケッチの連続だが、イルトゥイシ河畔の描写はそれだけではない何かを感じさせる。作者はこの場所を特に好み、対岸をみつめる時間をもとうとしている。それを読者に教えてさえいる。彼はそこへ、仕事以外でも惹かれるように出掛けて行く……

また私がこの河畔のことをしばしば口にするのは、ただただそこからのみ、神の世界、清らかな明るい遠方、人気のない自由な荒野、その荒涼たる風景が不思議な印象をあたえた荒野をのぞむことができたからである……

私はしばしばこの荒涼として果てしのない眼路のかぎりを、ちょうど囚人が自分の監房の窓から自由に憧れるように、見入ったものである。そこにあるありとあらゆるものが私にとって尊く可憐であった。底知れぬ蒼空に明るく輝く熱い太陽も、対岸のキルギスから流れてくるキルギス人の遠い唄のひびきも。ながいことじっとみつめていると、そのうちに、どこかの遊牧民の粗末な、くすぶった天幕みたいなものが見えてくる。小屋のほとりに立ち昇る煙や、そこで二頭の羊の世話をなにかやっているキルギス女が見えてくる。これらはすべて貧しく、粗野である。しかし、自由である。(『死の家の記録』第二部第五章)[5]

対岸のキルギス人の天幕は天幕であって天幕ではない。ドストエフスキーの意識は透明になって対象に透入している。刑場で彼を辛うじて支えた澄明な眼がここにもある。ドストエフスキーはこの時点で現実の存在を超えたものに触れている。彼は自分が惹きつけられているものを承知している。それはセミョーノフスキー練兵場以来旧知

Hosei University Repository



になったものである。ただ眼前の存在はそこに在って見えるだけではない。存在の奥にあって存在を支えているもの――作家はそれに執心する。それは表現しきれないかも知れない。ただ、それとなく比喩で語るだけである……

出獄後の第一作でドストエフスキーは、いわば、無人称ともみえる、主客未分の純粋体験を描く試みをやってみたのだろうか。

この作品では作家はこれ以上踏みこんではいない。そこに『死の家の記録』の性格があろう。

## Ⅳ

『罪と罰』はあまりプロットに意味はない。二人の主人公がともに〝存在の奥に在るもの〟に足をとられ、一つの像を結ぼうとして結び得ず、その可能性を探りつづけているところに焦点がある。

ラスコーリニコフには、『死の家』の主人公同様お気に入りの場所がある。彼は大学に通学中のときも、退学した今も、その場所に行く。そこはネヴァ河のパノラマをうつす絶好の場所だが、主人公には、むしろ「寒気」を感じさせるところである。そうしたマイナスの印象がありながら、何故とはなしにそこに惹かれていく。マイナスを感じさせるところが逆にラスコーリニコフをそこから離れがたくしている。彼は何かを直感し、それを解こうと腐心している……

空には一片の雲もなく、水は淡い青に近かった。こんなことはネヴァ河には珍しいことだ。寺院の円屋根は、ここ、つまり、小礼拝堂まで二十歩ばかりの橋の上から眺めるのが最上とされているが、今も眩しいほど輝いて、澄みきった空気をとうしてその一つ一つの装飾さえはっきり見分けることが出来た。笞で打たれた痛みがおさまると、ラスコーリニコフは打たれたことなど忘れてしまっていた。今彼をすっかり囚えていたのは、ある不安な、まだはっきりしない想いだった。彼はそこに佇んで遠くの方を長いことじっとみつめていた。ここは彼にはとくになじみ深い場所であった。大学に通っていた頃、いつも――といってもおもに帰り道だった

Hosei University Repository



が――かれこれ百度もいま立っているこの橋の上に立ち止って、このほんとうに壮麗なパノラマにじっと見入っていると、その度にある一つの漠然とした解釈の出来ない印象に驚きを覚えたものだった。そんなことが百回もあったろうか。この壮麗なパノラマからはいつもなんとも言えない冷気が漂ってくる。彼にとっては、この華やかな光景が唖で聾の霊にみちているのだった。彼はそのたびにこの陰気な謎めいた印象に驚き、自分を信じられないままその解答を先に延してきた。そして今、彼は以前には解き得なかった疑問と疑惑をはっきりと思い出した。(『罪と罰』第二編第二章)[6]

作者はこの場面を犯行後のラスコーリニコフの心象風景として描いている。平常の大学生時代にさえ感じた〝冷気〟が、今はむしろ呼び出した形で彼の心に流れこんでくる……

しかし、冷気は殺人者の空虚な心を襲う瞬間的な一陣の風ではない。そのことをよく知っていたのは作者である。華麗なネヴァ河のパノラマという存在を支えているもの――それが実在であるとしたら、それはそのまま非在であるかも知れない。「唖で聾の霊」とは単なる宗教上の比喩ではない。なんの手がかりもなく、いかなる応答も聞かれない「非在」なのであろうか。ラスコーリニコフが回答を延ばしてきたと同様に、ドストエフスキーも「存在の根底に在るもの」との遁れようのない対面は避けたかったに相違ない。それはあまりにも難解であり、今の彼の手には余る。

「金色の光」以来、ドストエフスキーは向うの世界に触れている。だが、その本質は漠然としたままである。『罪と罰』では作家はかかる境位にあり、このシチュエーションでネヴァ河の場面はかかれている。それは感覚として捉えられ、提示されている。

非在そのものは、本来プラスでもマイナスでもない。人間の主観がそれを虚無ととれば、虚無になる。ラスコーリニコフは「唖と聾の霊」に「冷気」を感じ、虚無を観た。ラスコーリニコフは、虚無という形で非在を理解しようとした……それが彼にはいちばん理解しやすかったからである。

スヴィドリガイロフの「永遠」もラスコーリニコフの理解と背中合わせに立っている。ただ彼には、なお信を求

Hosei University Repository



めようとするラスコーリニコフの「アイディアリズム」はひとかけらもない。彼のにべもない「永遠」の解釈はスヴィドリガイロフの透徹した意識を示している——

われわれは現に、いつも永遠なるものを不可解な観念として、何か大きなもののように想像しています。でもどうして何故必ず大きなものでなくてはならないのでしょう？　ところがあにはからや、すべてそういったものの代わりに、田舎の湯殿みたいな煤けたちっぽけな部屋があって、その隅々に蜘蛛が巣をはっている、そしてこれがすなわち永遠だとこう想像してごらんなさい。実はね、私はどうかすると、そんな風なものが目先にちらつくことがあるんですよ。(『罪と罰』第四編第一章)[7]

「もっと気休めになるような、公平な考えは浮かばないのか」というラスコーリニコフの苛立った詰問に、スヴィドリガイロフは「これがその公平なのかも知れない」と冷然と答える。スヴィドリガイロフは万象の深奥にある非在に気がついている。この何の手がかりもない〝虚〟に人が耐えられないことも彼は知っている。何か存在物を置くことによって手がかりになれば、なにも〝無い〟よりはましだろう。スヴィドリガイロフは非在を表現するよすがとして「蜘蛛の巣のはった煤けた田舎の湯殿」を置いた。

ラスコーリニコフはそこに意地の悪い否定だけを見たが、それはスヴィドリガイロフにとっては、ぎりぎりの認識であり、表現であった筈だ。

存在を成り立たせている実在がそのまま即非在であるとすれば、「永遠」の崇高性もまた、ないのではないかというのがスヴィドリガイロフの理解であろう。

崇高もまた逆に卑俗も、つまり、〝なにもないところ〟に人間はぶっかってしまった。「公平な見方だし、また無理にでもそうしたい」とスヴィドリガイロフは言う。非在の冷徹な認識がない限り、そこから一歩も前へ進むことは不可能だという彼の想念は、未だラスコーリニコフの理解の埒外にある。

ドストエフスキーは「これまで解答をひき延してきた」〝冷気〟に、スヴィドリガイロフによって一つの答えを

Hosei University Repository



出そうとしている。〝冷気〟に「湯殿」を対置することによって〝非在〟への、その探求への仮の構図を得た。『罪と罰』で二人の主人公を置いた意味はこの点からも大きいのである。

## V

イッポリートの告白は、人間が「在る」ということの意味を正面切って問うている。ここでは十七歳の手紙の問いが再度問い直され、整理された形で提示されている――それは、人間は〝ただ在るだけ〟かどうかということである。

イッポリートは重い肺患で余命いくばくもない十八歳の若者として設定されている。彼は生命と意識の背反のなかで、その不条理な存在の形を得心しようとする。「我在り」と一度意識した以上、それは誰かに責任をとってもらわねばならぬ――という主張がイッポリートの根底にある。

もし宇宙に調和があるならば、それは絶対者が存在するということであり、人間はその調和に加わる権利と責任がある。しかし、宇宙の主の恣意で人間が除外され、いわば、「被選別者」として調和に参加できないならば、絶対者の存在になんの意味があるだろうか？

また絶対者の存在そのものが否ならば、「世界は悪魔の寄席芸」であり、透徹した意識をもった高度の生物が何故必要なのか。イッポリートの思索は、人間を〝在らしめたもの〟をめぐってゆきつ戻りつする。

イッポリートの想いを支えているのは、死への怯えである。刑場のドストエフスキー同様、一刻も早くこの問題を解かねばならない。仮りに宇宙の調和を維持するために原子のプラス、マイナスが必要だとして、そのマイナス分が何故他ならぬ自分なのか――自分の意志とは全く無関係に世界から除外されるのか？　「被選別者」の意味を彼は彼自身の問題として解こうとする。多岐にわたる「告白」もここに収斂してゆく。

この問いが解答不能の問いであることをイッポリートが知らない筈はない。彼が自分の不条理の生をイエスのそれに重ね合わそうとしたのも偶然ではない。彼は人類最高の人間を連想することによって、その死を想うことによ

Hosei University Repository



って諦念に達しようとする。

この絵を観ていると、自然というものが何かしら巨大な、情け容赦もない物言わぬ獣のようにおもえてくる。つまり、さらに正確に、ずっと正確に言えば、変な言い方だが、偉大な、限りなく尊い存在を訳もなく引っ掴んで、粉々に打ち砕き、気にもとめずに何の感情もなく呑み込んでしまった最新式の何かとてつもなく大きな機械のように思われてくる。しかもこの場合の存在というのは、それだけで、自然全体にも、そのあらゆる法則にも値するようなものであり、また、おそらくはこの存在の出現のためにのみ創られたとも考えられるこの地球全部にも値するものなのだ。一切のものを征服してやまないある暗愚な傲岸な、いわれなく永遠的な力の観念がこの絵によって表現されているものとみえて、この観念はおのずから観る者に伝わってくるのである。(『白痴』第三編第六章)[8]

人間が考え、人間が創った価値もすべて相対的なものであり、自然律のもとでは色を失う。それはすべての価値に先行する。イッポリートは、一切を支配するのは〝自然律〟だと確信せざるを得ない。イエスすら打ち克てなかったとしたら一体他の誰がそれから免れることができよう。森羅万象が「在る」ということは、すべて自然律の支配下に「在る」ということである。「在る」ということは、つねに自然律とともに「在る」ということであり、それ以外の形はあり得ないという単純明確な事実を「健康な」人間は忘れているのではないかとイッポリートは思う。彼は一刻一刻の生の意識を嚙みしめながら、自然律に囚われて身動きの出来ない自分を忌々しく感じている。

ドストエフスキーは、イッポリートという極限状況にある若者を設定して、人間存在の〝原型〟を描こうとした。〝死への存在〟としての極限の意識を克明に辿ることによって、「在る」ことの意味を凝縮させようとしたとも言えるであろう。

ここのところでドストエフスキーはその文学を大きく展開させる機縁を得た——彼の好きな言葉でいえば、「永遠の根底」に逢着したのである。『白痴』の創作ノートをみると、イッポリートは後から設定された人物であるが、

Hosei University Repository



その後の作品との関連から考えると作家が彼を登場させた意味はきわめて深いのである。

## Ⅵ

『悪霊』の創作ノートではキリーロフは端役である。凡庸ともみえる一介の「技師」として、それもかなり図式的に描かれ、扱われている。当然ノートに占める分量も少ない。決定稿でのシャートフ、ピョートル、キリーロフの三人の割合ではない。七一年三月一日付の書込みにネチャーエフと公爵（スタヴローギン）の対話が記されており、技師の〝神〟の想念について意見が交わされているのが、最大の部分であろう。

ネチャーエフは公爵と技師のことを話す。「彼の思想は社会成立の支えになっている礎をそこから引き抜いてしまわない限り、社会変革のあらゆる試みは徒労に終るだろうという点にあるんです。彼はこの礎が神であり、神への信仰だと考えているんです。

誤りは神にのみあるという彼の考えが正しいかどうかはわかりません。そのことを考えてみる時間がなかったのは残念ですが、しかし、彼の思想はなかなか力強いですよ。世界のすべての社会が神を信じていたから、神を信じることをやめてしまったら、すべての社会は変るだろうと考える根拠はあります。人間は肉体的にさえ変るだろうと彼は言います。ここには思想があるでしょう。……ね？」

公爵「いや、それは大きな思想とさえ言えるな。彼の論証を引っくり返して見給え。神を失うと、人間が肉体的にさえ変るものだとしたら、こうも言えるわけじゃないか――肉体的に変化することなしには、人間は神への信仰を失うこともないと」[9]

ネチャーエフは、「それはただの言葉の遊びであり、いまは問題は言葉にあるんじゃない」と言う。活動家の立場から、社会制度変革の問題としてキリーロフの思想をとらえているのであり、その限りでは至当であろうが、ス

Hosei University Repository



タヴローギンの真意はそこにはない。神を否定する以上人間は精神的のみならず、肉体的にも変化しなければならない――と「公爵」は考えている。この発想は、決定稿の「ゴリラから神の撲滅までと神の撲滅から地球と人間の物理的変化まで」の表現とつながる。本文ではその後――「人間が神になると、肉体的にも変化します。そして世界も変化し、事物も変化します」とキリーロフは語っている。ノートでは「人神」というところまではいっていないが、ノートに記されたこの〝肉体的変化〟という発想は「人神」の観念の基礎になるものであり、注意しておく必要がある。

それにしてもキリーロフほど決定稿で大きくなった人物は、ドストエフスキー文学全体を見渡してもいない。おそらく作家も当初はまったく予想していなかったのではなかろうか。キリーロフのおもしろさもこの偶然ともみえる展開にあるとも言えよう。

技師キリーロフを「ネチャーエフの実行者」――ピラ撒きとして発想したとき、作者の頭にあったのは何だったのだろうか。技師の自殺願望をシャートフ殺しに結びつけるプロットがまずあったであろうことは想像に難くない。このシャートフとキリーロフの関わりの構図は最初のまま、キリーロフの自殺のモチーフだけが深められて行く……

*

一年中断した後――七二年十月末から十一月ごろと推定されるノートではすでに「キリーロフ」の名前があらわれ、定着している。

キリーロフには、真理のためには今すぐにでも自分を犠牲にするという民衆的な思想がある。四月四日の不幸な盲目的な自殺者（皇帝暗殺未遂者カラコーゾフ）でさえ同時に自分の真実を信じていた……

真理のために自己と一切を犠牲にすること――これはこの世代の民族的特質である。神よ、この世代に祝福を与え、彼らに真理を理解せしめ給え。何故なら問題のすべては何を真理と見做すかにあるからだ。そのためにこそこの小説もかかれたのである。(10)

Hosei University Repository



これは『悪霊』ノートのほとんど終りの部分だが、そこではまだキリーロフの思想が固まっていない様子がうかがえる。「民衆的思想」とか、「カラコーゾフ」とかは、後のキリーロフの形而上学とはあまり結びつきそうもない。ノートの筆者も言っているように、「何を真理と見做すか」であって、決定稿のキリーロフの考える「真理」は、ここの「真理」とは違うだろう。

ノートを綿密に調べてもこの段階で「人神論」が固まった形跡はない。結局、キリーロフの自殺が「民衆のための死」から「人類のための死」に昇華するのは、作品の進捗の過程のなかでなのだ。

作者が小説として苦労したのは、自殺の動機づけだろう。人神論はその紆余曲折のなかで浮かび上がってきたような気がする。最初からスタヴローギンに確実な「人神」の観念があったのではあるまい。現実的でありそうで抽象的な、「民衆のための死」から、突飛にみえながら具体的な「人神」を証するための死まで、自殺の説得力ある説明を求めて作家は苦慮している。そのプロセスでドストエフスキーの想念はふくらみ、「技師キリーロフ」は最初の構想とは別に思わぬ展開をしていく。それは、意想外にもイッポリートの延長線と交差する。

イッポリートは、「今、ここに在る」ということを執拗に考えようとした。彼は、「ただそこに在るものが在るだけ」という認識では絶対に納得しようとはしない。「在る」からには「在る」だけの意味がある筈であり、それを「創造者」は「被創造者」に説き明かす責任があると彼は思っている。この点では彼は最後まで神を信じていたし、信じようとしていた。その想念の中心に〝調和〟の問題があり、究極までそれにこだわったのはこのためである。

キリーロフは〝調和〟の問題では、イッポリートとわかれる――〝調和〟はキリーロフの関心の外である。彼はただ「在る」という問題だけを〝純粋培養〟し、考え尽くそうとする。ただ、キリーロフの問題設定がイッポリートの問いを基礎においていることは事実であるし、〝イッポリート〟ぬきでは〝キリーロフ〟は考えられない。キリーロフの人神論はその淵源をイッポリートにもつ。

キリーロフがイッポリートと根本的に相違するのは、「在る」ということを〝枠〟として考えていることであろう。「在る」というのは、自由に存在するということではなく、そういう形で存在せざるを得ない人間存在の様式

Hosei University Repository



であるとキリーロフは認識している。この存在様式の捉え方が彼の発想の根底にある。人間が存在するということは、既定の、不変の〝枠〟のなかに、やむを得ず「ただ在る」ということである。その「在る」ことが〝調和〟の内にあろうと、外にあろうとイッポリートのような関心は全くない。ただ理不尽な〝枠〟のなかに「在る」ことだけが彼には不快なのである。

イッポリートは自分の死の理由付けを探っている。彼はこのまま「在りつづける」ことはないから、間近な死こそその最大、唯一の関心事であり、彼は死の意味を追い続ける……　同じ「在る」をめぐっても二人の焦点は異る――イッポリートには存在全体を見渡す余裕はない。いわば、イッポリートは〝死〟の条件を探り、キリーロフは〝生〟のそれを求めている。

イッポリートの心の底にあるのは、死への恐怖である。彼の〝調和〟への希求もここにつながっている。キリーロフはこの「恐怖」を逆手にとる。人間の思想の根底にあるのは死への恐怖であり、それが一切を規定しているとすれば、この「恐怖」をどうにかしない限り生の確立はない――ここに彼の人神論の発想の根源がある。イッポリートの終った地点からキリーロフは歩き始める……

〝枠〟の本質は何か――そこから人間が脱出する可能性はあるのか。

## Ⅶ

〝なぜ人間であり、人間以外のものであり得ないのか〟――ポブリーンチン流に言えば、キリーロフの問いはこの思念を軸に往来する。「人間」という〝幅〟のなかで人は自足して生きているが、そこからはみ出られないとしたら、人間として「在る」ことはいかなる意味をもつのか。はみ出られないことに気がつくことは、〝幅〟の限界に気付くことである。それがそのまま人間存在の限界を決定し、その形を規定する。〝幅〟の正確な認識は人間がはめられている「枠」の冷静な確認でもある。キリーロフはこの「枠」を、たとえば、「大石」にたとえる。

Hosei University Repository



仮に大きな家ほどもある大石を想像してごらんなさい。そいつが宙にぶら下がって、あなたがその下にいるんです。ところでそれがあなたの頭の上へ落ちて来たら――痛いでしょうか？

……実際その下に立ってみたら、それがぶら下がっている間ぢゅう、あなたはさぞ痛いだろうと思って、とてもおびえるでしょう。どんな第一流の学者だって、第一流の医者だって、みんな誰でもむしょうに恐怖にかられるでしょう。誰でも痛くないと承知しながら、誰でも痛いだろうと思って、非常に恐れるでしょうね。(『悪霊』第一編第三章八)[11]

人間が「在る」ということは、頭上に吊る下げられた「大石」とともに「在る」ということである。「在る」かぎり、なんびとも例外ではあり得ない。一瞬の死に痛みはないと承知しながらもその恐怖から逃れられないとすれば、人間存在を規定しているのはこの〝不安〟である。キリーロフの指摘する「不安」は漠然とした不安ではなく、「大石」とともに「在る」確たる不安である。人は「大石」の外に立つことは出来ない。生まれた瞬間から「大石」の下に「在り」、「大石」の下で生き、そこで死ぬ。これほど明確なことはないけれど、これほど納得の出来ないこともないとキリーロフは考える。「大石」からはみ出す可能性が皆無だとすれば、人間存在とは「大石」そのものだということになってしまう。「大石」は人間を規定する絶対の〝枠〟なのだろうか。

キリーロフの思想の根本にあるものは、肚に据えかねるということである。そういう条件で生きさせられるということは、得心の仕様のないことだ。人はその始原も終焉も全く知ることがない。人間にとって最もかけがえのないものは、自己の生の筈だが、自分になんのかかわりもなく自分の生の誕生と消滅が決定される。この人間存在が必然的にもっている他律性と自意識とは絶対に相容れない。この一点ではキリーロフはイッポリートと重なる。

人類はその誕生以来、この他律をどう考えたらよいのかということに――他律を手なづけることに腐心してきた。他律の自律化に人類の歴史は費やされてきたと言えなくもない。〝生かされて在る〟ということを納得するために人々はどれ程の精力と犠牲をはらってきたことであろう。他律を手なづけようとして逆に手なづけられたのは人間の方ではないかとキリーロフは思う。彼の特長は少年のように、人間の存在の原点に疑問を抱き続けて倦まな

Hosei University Repository



いことである。〝人神〟の発想の根底には少年の純粋さと執拗さがある。

他律を他律として確認しつづける限り、存在自体の違和感は消えない。「在る」ことは不条理であり、不可解であり、不快である。意識をもちはじめた時、すでに「大石」の下にいたことは、人間の自尊心をいたく傷つける。「大石」は無限大であり、遁れようとしてもどこまでも追いかけてくる。人間には自律も、自立もあり得ない。人間は「ただそこに在るだけ」の存在ですらもなく、「ただそこに在らされるだけ」の存在ではないのか。

キリーロフには、イッポリートのような絶対者に対する憎悪も愛着もない。彼は直接〝そういうもの〟への発言をしていない。彼は人間の「在る」という形について冷厳に観察、分析し、その「在る」べき姿を執拗に求めているだけである。このことはキリーロフが他律を他律として確認しつづけていることと無縁ではない。彼は他律を自律化することの幻想に酔うことを峻拒する。他律と妥協したところで人間の存在の形が本質的に変わるわけではない。キリーロフは人間の存在の条件として他律性を正確に認識する。

「大石」も他律性も正確に認識しながらそれをどうすることも出来ないというところに人間存在の最後の形がある。認識と解答が分裂しているなかに人間は「在る」。いわば、〝宙吊り〟が人間のシチュエーションである。「大石」が頭上に吊され、その当の人間が宙吊りになっているとしたら、これはかなり滑稽な図であろう。それが人間が「在る」ということなのだとキリーロフは信じる。彼は身も蓋もないところに人間を追い込んでいる。

## Ⅷ

「人神論」はスタヴローギンがキリーロフに植えつけたとされている。周知のように、シャートフにスラヴ主義、ピョートルに革命思想を吹き込んだと同様に、スタヴローギンは自己の〝出口〟を見付けるてだてとして人神論もキリーロフに移植したのである。少なくとも現存の決定稿ではそう説明されている。だが、スタヴローギンには人神に至るプロセスは書かれていない。彼が最初どんな人神を抱懐していたかは知るすべもない。いずれにせよ人神は、スタヴローギンに胚種をもっていたにしても、キリーロフが育て上げた観念である。作者もこのことはよく承

Hosei University Repository



知していたに相違ない。キリーロフの人神――時間論に耳を傾けながら、かつての師は、「どうも現代では難しそうだ」と物思いに沈んでいるかのように呟く。それは成長した弟子との距離を表している。人神はスタヴローギンの理解のすでに及ばないところにいる。

それはスタヴローギンに意外だったようにドストエフスキーにも意想外だったはずだ。創作ノートでは数にも入れていなかったキリーロフが決定稿では独自の観念を展開してスタヴローギンと並立する存在にまでなったのである。ドストエフスキーは彼を書いていくうちに作家がこれまで無意識のうちに触れていた存在論の領域に意識的に入りこみはじめたことに気付いたことであろう。キリーロフはシャートフ殺しの「犯人」役から、ドストエフスキーの、ある意味では極北の思想を担い得る人物にまで成長したのである。そこにプロットどおりにはいかない小説の面白さがあろうが、作家はキリーロフを得て一つの領域を切り拓いたのである。

『白痴』と『悪霊』はテーマ的にも重なるところがあるが、比喩の点でも類似している個所がある。ムイシュキンはエパンチン将軍夫人や娘達を相手に画題の話をするが、そのとき彼は、予想外に書類上の手続きが短縮されて突然死刑の執行が決まった死刑囚のことに触れる。〝処刑一分前の囚人〟が彼の勧める「画題」だったからである。その死刑囚は典獄の通告に、「だって、それにしてもこう急じゃやりきれない」と呟く…… ムイシュキンは更に処刑台上の囚人の描写に移る。

> もう頭を丸太ん棒の上にのっけてじっと待ちながら……彼にはわかっているんです。と、不意に頭の上を鉄の滑る音が聞える。(傍点ドストエフスキー)(『白痴』第一編第五章)[12]

ギロチンの斧と「大石」を吊る下げた綱とはダブル・イメージになっている。「こう急じゃやりきれない」と抗議した死刑囚と同じように、何時切れるかも知れない綱の下に人間は「居る」。それは囚人同様抗議してもはじまらないことであるが、ただ黙ってもいられない。

Hosei University Repository



何時その石が落ちてくるか、人は知り得ない。しかし、それは必ず落ちてくる――落ちてくるまでの時間、それが人が「在る」ということであり、その不安の下で生きるということが生そのものなのだ。このことをキリーロフは確実に認識し、この人間が規制されている〝枠〟からの脱出の方途を探っている。

「大石」は人間存在の一切を握る死のイメージとしてキリーロフの根幹にあり、「大石」をどうしたらよいのかが彼の最大の課題である。「大石」に縛られている限り人間の〝絶対の自由〟はない。そこには従前どおりの退屈な人類の歴史の反復があるだけだ。

他律、大石、宙吊りの三点が人間の存在の形を決定しているならば、死を先取りするしかないというのが、キリーロフの考え方であろう。〝新しい人間〟の意味は「最高の自由」のなかにしかない。

誰でも最高の自由を欲する者は必ず自殺する勇気を持っていなくてはならない。自殺する勇気のある者は欺瞞の秘密に気がついたのです……自殺する勇気のある者が神です。(『悪霊』第一編第三章八)[13]

キリーロフがアントン・ラブレンチヴィッチに語った内容は多岐にわたるが、核となるのは、現在まで人間が心ならずも引きずって来た生の形を自覚し脱却しようとしない限り、真の生――幸福はあり得ないということである。生は「苦痛と恐怖」であり、それを「克服」した者だけが神になる。彼の神は〝絶対の自由〟のシノニムである。人は生に執着するあまり死を恐れる。すり切れた欺瞞の生にしがみついている間は、人間は相対的自由のなかで生きるしかない。それは真の生ではない。

キリーロフは「大石」の外に立つことに固執する。それが本来、人間が「在る」ということなのだと彼は信じる。これまでのお仕着せの生なら生きない方がましなのだ。人がこれまでの石の下の生に執着する限り人類の歴史は退屈な、エンドレスの循環を性懲りもなく繰り返して行くにすぎなかろう。

一つの存在形式しかないのか――ということに人が一人でも気がついたということは、それはその形式が歴史的

Hosei University Repository



使命をすでに終えたということである。人類が存在しつづけるためには、これまでのエンドレスの生を見限って存在形式を根底から覆えさなければならない。この存在形式の転覆の可能性をキリーロフは模索する。それが、彼が人類史を二つに区切った意味である。

「ゴリラから神の撲滅まで」と「神の撲滅から地球と人類の物理的変化」までとキリーロフは言う。石の外に出ることによって――存在形式の〝転覆〟によって、人間はこれまでの人間から本質的に変化する……あるいは、根底から変化しない限り人類の第二の歴史はない。

今の人間はまだ本当の人間じゃありません。今に幸福な、誇りに満ちた新人が出現するでしょう。生きても生きていなくても同じになった人が、他ならぬ新人なのです。苦痛と恐怖を克服した人は自ら神となるのです。(11)

一方、今までの神はなくなってしまう。(『悪霊』第一編第三章八)

神に依拠していた時代から、神を失った時代に入りながら、〝神の時代〟と同じ存在形式のうちにありつづけようとするのは、虫がよすぎる。それは矛盾であり、怠慢ではないかとキリーロフは考える。人は〝神なき時代〟の意味を正確に認識し、自分たちの人間としての〝再生〟を希わなければならない。

キリーロフの「新人」の条件は厳しい。果して同じ生を反復するしか能のない旧人類に再生は可能なのか……多分、それは彼も期待していないだろう。少数の、峻厳な条件に耐えられる人間だけが、まず新しい時代の、〝新しい人間〟として現われる。

「苦痛と恐怖を克服した者は自ら神になる」とキリーロフはこともなげに言っているようにみえる。だが、この言葉の裏には「大石」と対決しつづけた彼の苦渋が滲み出ている。結果としてそれは「人神」でもなんでもよい……「大石」と対した論理の果てにあるものがそれなのだ。「人神」という言葉がいかに奇矯にきこえ、滑稽にみえようと、それは「在る」ことの意味を問いつづけた論理の帰結なのである。

死は一切の意味づけを破壊する。それを超えて「在る」ことの意味づけを断念しないとすれば、すべては死の超

Hosei University Repository



克の一点にかかる…… キリーロフは「人神」の虚しさを知らないわけではない。しかし、それ以外に何故「在る」のかが答えられないとすれば……キリーロフが「人神」の虚しさを認めた瞬間に、人間の存在形式は忽ち元の地点に――石の下に逆戻りしてしまうのである。「多分うまく行かないだろう」と言う語り手Gの当然の評価にも、「そんなことはどうでもいい」と彼が素気なく答えたのは当然であろう。

「死の苦痛と恐怖を克服した者」と「生きても生きていなくても同じになった人」とは、同じ〝新しい人間〟として語られてはいるが、必ずしも同一ではないようにみえる。一人の人間を二つの面から言ったのであろうか。この辺はキリーロフの意識のなかでもかなり曖昧のような気がする。論理的には一人の人間につながらないわけではないが、やはり、それぞれの人間として別々に存在すると考えた方がおもしろいであろう。

「人神」は表現の一つの極北だが、「生きても生きていなくても同じ人」というのも重要な思想である。このなかには『悪霊』の核心が語られている。

〝生きても生きていなくても同じ〟というのは、キリーロフの師スタヴローギンの感覚でもあるが、両者の境位は同じにみえて異なる。スタヴローギンは否定の〝意味〟を究めようとし、その果てに〝何もないところ〟に出てしまった――肯定も否定も意味をもたない砂漠に彼は達した。それは超意味の無色の世界である。スタヴローギンの強靱な精神はこの超意味の砂漠に耐える。

キリーロフは砂漠に出ようとは思っていない。そこへ出てしまっては万事休すなのだ。どうしたら〝生きても生きていなくても同じ〟ところに出られるのか――彼はあくまで意味の内側の世界でこの問いを解こうとする。それは意味の世界のぎりぎりの極限ともみえる……

存在が時間によって規定される以上、人間存在の方で意識を変える以外にない。時間が消失すれば、存在もまた無窮である。そこでは死は決定的意味をもち得ない。キリーロフは積極的ニヒリストであり、その思想は現世界の肯定のうえに――肯定しようとする志向性のうえに立っている。ここでは師と対蹠的位置にあり、明敏なスタヴローギンも弟子を最も理解しがたい一点である。スタヴローギンにはキリーロフの生への愛着と自殺哲学が彼のなか

Hosei University Repository



で両立している理由がわからない。スタヴローギンには珍しく、苛立ったような訊ね方をする。冷静なのは弟子の方である。

「生活は生活、あれはまたあれです。生はあります。しかし、死というものはまるでありゃしない」

「きみは未来の永世を信じるようになったんですか？」

「いや、未来の永世じゃない。この世の永世です。一つの瞬間がある。その瞬間に到達すると、時は忽然と停止してしまう。それでもう永世になってしまうのです」

「きみはそういう瞬間に到達し得ると思いますか？ ……それはどうも現代じゃ不可能らしいね」と同じく些かの皮肉もなく、ゆっくりと物思いに沈んでいるかのようにニコライは答えた。「黙示録の中で一人の天使がもはや時なかるべしと言っていますがね」

「知っています。あれはあの個所では非常に正しい。明快で正確です。人間がみな幸福を獲得した場合、時はもはやなくなってしまいます。必要がないですものね。非常に正しい思想ですよ」

「一体どこに隠されちゃうんでしょうね？」

「どこにも隠されていゃしない。時は物じゃなくて観念ですからね。頭の中で消えてしまう」（『悪霊』第二編第一章五）[15]

スタヴローギンは、「理性を失ったがために宏量であり得た」と弟子を評したが、意識のなかで時間を消すとは、いわば時間の両端を掴んで一つに合わせることであり、彼には不可能に思えたのであろう。キリーロフは「未来の永世」を現時点に呼び込むことによって、〝死の意識〟を消去しようとする。人間存在の意識の革命によってキリーロフは、〝生きても生きていなくても同じ〟ところに達しようとした。それは師のような全否定の果ての無為の世界ではなく、「大石」から遁れ出た〝絶対の自由〟を前提とした全肯定の世界である。時間を消去して生を考え、生と死が一如となった時、〝すべてよし〟の感覚も生まれたのであろうか。「すべてがいいということを知っている

Hosei University Repository



者にはすべてがいいのです」――キリーロフの言葉はこの上なく難解にひびく。

## Ⅸ

ドストエフスキーはキリーロフをかくことによって「在る」ことの意味を究めようとした。人間が今、存在している場所からだけその存在をみてもそれはひとつの姿しか顕さないであろう。視点を百八十度変えれば、また、これまで見えなかったものまで見えてくるのではないか。スタヴローギンが従来の視点からその究極まで辿った人物であるならば、キリーロフは反対の方向から歩いてきた人間である。それは、また「在る」ことの意味の極北に達している。スタヴローギンが意味の世界の果てに出てしまったとすれば、キリーロフは意味の世界のなかで極限にまで至ったのである。作家は当初キリーロフをそこまで予想してはいなかった筈だ。決定稿でキリーロフは、シャートフ、ピョートルをはるかに超えて成長して行く……

ドストエフスキーはキリーロフでひとつの世界に達した。通常〝キリーロフの木の葉〟は彼の人生肯定を表わしたものと解されているが、それだけではないであろう。

ぼくはついこの間、黄色い葉をみましたよ。緑のところが少なくなって、端の方から枯れかけていました。風で飛ばされたんですね。ぼくは十ばかりの頃、冬、わざと目をつぶって青々とした、葉脈のくっきり浮き出た葉を想像してみたものです。太陽がきらきら輝いている。目を開けてみると、それがあまり素晴しいので信じられない。それでまた目をつぶる。(『悪霊』第二編第一章五)[16]

このときドストエフスキーは木の葉だけをみていたのであろうか。それは時間もない、存在をつきぬけた世界を語っているような気がする。かつて流刑中のイルトゥイシ河畔で対岸にけむるジプシイの天幕を眺めていたとき、同じような世界をかいまみた。今またそれが蘇ってきたのである。それは存在も時間もない、一切の「在る」こと

Hosei University Repository



をもたない世界なのだろうか。目をつぶると、すべてが消失する筈なのに、逆にかえってありありとみえる。世界はただ意識のなかで存在しているだけかも知れないのだ。

作家は今「在る」ことの意味を追っているうちに、超意味の世界に出てしまった。二十年ちかい昔、イルトゥイシの岸辺で無意識にみたものを、今ドストエフスキーは意識して凝視している。

〃生きても生きていなくても同じ〃世界を求めながらキリーロフは〃木の葉〃の世界に来てしまった。この「木の葉」のイメージから「すべてよし」の言葉につながって行くのは偶然ではない。ドストエフスキーはキリーロフの「木の葉」を「すべてよし」につなげることによって超意味の世界の意味を語ろうとしたのである。

注

(1) ドストエフスキー三十巻本全集第十一巻〈『悪霊』創作ノート〉二三四頁　「ナウカ」出版所　レニングラート　一九七四年
(2) 同前　二四一頁
(3) ドリーニン編ドストエフスキー書簡全集第一巻　四六～七頁　国立出版所　モスクワ・レニングラート　一九二八年
(4) 同前全集　第八巻〈白痴〉　五二頁　同前　一九七三年
(5) 同前全集　第四巻〈死の家の記録〉　一七八頁　同前　一九七二年
(6) 同前全集　第六巻〈罪と罰〉　九十頁　同前　一九七二年
(7) (6)と同書　二二一頁
(8) (4)と同書　三三九頁
(9) (1)と同書　二六五頁
(10) (1)と同書　三〇三頁
(11) 同前全集　第十巻〈悪霊〉　九三頁　同前　一九七四年
(12) (4)と同書　五六頁
(13) (11)と同書　九四頁
(14) (11)と同書　九三頁
(15) (11)と同書　一八八頁

Hosei University Repository



(16) (11)と同番　同頁　八九

(11)　(11)と同番　[illegible]

(12)　(11)と同番　[illegible]

(13)　(11)と同番　[illegible]

(14)　[illegible]

(15)　(11)と同番　[illegible]

(16)　(11)と同番　[illegible]

(17)　(11)と同番　[illegible]

(18)　(11)と同番　[illegible]

(19)　(11)と同番　[illegible]

(20)　[illegible]

(21)　[illegible]

(22)　[illegible]

(23)　[illegible]

(24)　[illegible]

(25)　[illegible]

(26)　[illegible]

(27)　[illegible]

(28)　[illegible]

(29)　[illegible]

(30)　[illegible]

(31)　[illegible]

(32)　[illegible]

(33)　[illegible]

(34)　[illegible]

(35)　[illegible]

(36)　[illegible]

(37)　[illegible]

(38)　[illegible]

(39)　[illegible]